

沈没男

海野十三

青空文庫

(×月×日、スカパフロー発)

余は本日正午、無事ロイヤル・オーク号に乗艦せるをもつて、御安心あれ。

余は、どうせ乗艦するなら、いきのいい海戦を見物したいものと思ひ、英国海軍省に対し、ドーヴァ、ダンジネル、ハリツチの三根拠地のいづれかにて、英艦に乘込みたき旨要請したのであるが、それは彼の容れるところとならず、わざわざ北方スコットランドのそのまた極北のはなれ小島であるオークニー群島へ送りこまれたのは、甚だ心外であつた。このスカパフロー湾は、相手国たる独国の海軍根拠地ウイルヘルムスハーフェ

ンを去ること実に五百六十哩マイルの遠隔えんかくの地にあり、独国軍艦にお目にかかるのには、外野席以上の遠方えんぽうの地点で、これほど縁どおいところはなない。

余は、いささか憤慨ふんがいして、軍港副官ぐんこうふくかんにどなり込んだので

あるが、彼はむしろ意外だという顔つきで、余のためにこれほど、生命の危険なき安全なる軍港をえらび与あたえたのに、なにが気に入らぬかといひ、四分の一世紀前の第一次欧州大戦のとき、ここが如何に安全であつたかという歴史について、諄々じゆんじゆん説明があつた。あのときには、しばしば英国全艦隊がこの港内に集結して鋭気を養つていたそうで、すでに試験ずみの安全港であるそうな。

余が乗艦したロイヤル・オーク号は、現在このスカパフロー礎て

いはくちゆう

泊中^{いはくちゆう}の軍艦中で一番でかい軍艦であつて、二万九千百五十トの主力艦であり、速力は二十二ノツト、主砲としては十五吋^{インチ}砲を八門、副砲六吋十二門、高角砲^{こうかくほう}四吋八門、魚雷^{ぎょらい}発射管^{はつしやかん}は二十一吋四門という聞くからに頼母^{たのも}しい性能と装備とを有して居り、ことに高角砲分隊の技術については、英海軍中第一の射撃命中賞を有しているとかの噂も聞いて居り、さてさて素晴らしい軍艦に乗せてもらつたものだど喜んでゐる次第である。現に只今も、独機八機現わるといふ想定のもとに、どすんどすんと空砲をはなつて、猛練習であるが、その凄^{すさまじ}い砲声を原稿に托^{たく}して送れないのが甚だ残念だ。これより余は艦長にインタビューすることになつてゐるので、ロイヤル・オーク号乗艦第一報をこれにて終る。

(×月×日、スカパフロー発)

余は今、純じゆんもう毛じゆんめん純じゆんめん綿じゆんめんのベッドに横よこたわりながら、昨日に引

続き、スカパフロー発の第二報の原稿を書いているところである。寝ていては、報告が書きにくいので、起きようかと思うが、すぐサラ・ベルナールのような顔した看護婦が来て、上から押さえるので、やりきれない。もつとも余は、すっかり風邪かぜをひいて、かくの如く純毛純綿の中にくるまって宝石のような暮しをして居れど、頭はビンビン、涙と涙はなとが一緒に出るし、悪寒おかん発熱はつねつでガタガタふるえている始末しまつ、お察さつしあれ——といったのでは、よく分らないかもしれないが、早くいえば、余は只今、ロイヤル・オーク号上に居るのではなく、スカパフロー軍港附属の地下病院の一

室に横わっているのである。

余は、乗艦後二十四時間もたたないのに、こんな病院に横わろうとは、夢にも思わなかつた。これは決して、余が小胆しょうたんのあまり自ら進んでロイヤル・オーク号から降りたわけではなく、只今では、生きている人間は、全部該艦がいかんから締め出しを食っているのだから誤解のないように。だから、余も亦またこうして生きていく限り、あの艦には乗れないのである。余は、無理やりに退艦たいかんさせられしまった。しかも一時間十五分というものを、夜の北ほっか海いの、あの冷い潮しおに浸ひたっていたのであるから、まことに御念の入ったことであつた——という訳は、わがロイヤル・オーク号は、昨夜、スカパフロー港の底に沈しまんで了つたのである。

余は、なんにも覚えていない。あのとき夜の甲板かんばんへ、新鮮な
る空気を吸いに出たことまでは覚えているが、あとは知らない。
そうそう、大爆発があつたことは知っている。とたんに、艦ふねは大
いしんどう
震動したつけ。甲板を走つていく水兵が、「独軍の飛行機の空
襲だ。爆弾が命中したぞ」と叫んでいたことを、今思い出した。
しかしプロペラの音は全然しなかつたのである。仍よつて案ずるに、
独軍では、無音飛行機むおんを使つているか、乃至ないしはグライダーをもつ
て、わがロイヤル・オーク号を空爆くうばくしたものにちがいない。

(×月×日、てるくにまる照国丸より)

余は、ロイヤル・オーク号事件にて少々健康を痛めたのを口実
に、英国を去り、仏国へ行つていた。これは、ちよつと英国とい

う国が、癩しやくにさわったのにも原因する。しかし個人の鬱憤うつぶんのため、一時にもせよ、原稿のネタを仕入れるべき地元英国じもとを去ったことは、甚はなはだよくなかったと気がついたので、遂ついに再び英国入りを決し、幸さいわい照国丸がロンドンへ向うことがわかったので、船室のないのを承知のうえで、無理やりに頼みこんで、ようやく同船の特三等船客となることができた。

只今は、朝食を終ったばかりであるが、船は今、ドーヴァを左に見て、いよいよこれよりテムズ河口へ入ろうとしているところだ。附近は、独国海軍の侵しんにゆう入を喰い止めるために、到いたるところに機雷きらいげん原が敷しかれてあるので、かなり面倒なコースをとらなければならぬ。しかし安心なことには、英国海軍当局は、わ

ざわざパイロットを、わが照国丸に配置してくれたので、もう心配はない。さつきは、せんきよう船橋に、このパイロットがまつくら松倉船長と肩をならべて、なにやら海上を指しているのを見た。軍人あがりとかいう噂だが、なかなかたくま正しい面構えのつらがまパイロットで見
からにたのも頼母しく感じた。

この調子では、夕方までには、ロンドンに入港することが出来る筈である。

前方にハリツチ市が見えてきた。あれこそ、余が最初、はけん派遣を願
い出でたるハリツチ海軍根拠地のあるところであった。わが照国丸は、ほかドーヴァを越えてすぐ左折し、チームズ河へ入るものと思
いの外、ほかそんな様子も見せないで、ずんずんまつすぐ真直に進行して

いる。やがて、これではハリツチの海岸にのりあげそうである。なんだか、余の気が、船をハリツチの方へ持つていくように感ぜられて愉快である。

さつきは、同室内に乗合せているノールウエー船（シンガポール沖で撃沈された船）の乗組員にインタビューし、その神秘な遭難談を原稿にとつた。いずれ明日までに整理のうえ、送稿する。

今、甲板で、さわいでいる。なにごとかと聞いたところ、オランダの汽船が、機雷にやられて沈んでいるのが見えるそうである。水面から二本の煙筒を出してるのが見えるという話だ。遭難船なんてめずらしい観物だ。これから甲板へ駆け上つて、写真

にうつして置こうと思う。だから原稿は、一先ひとまずここにて切る。

(×月×日、ハリツチ発)

ハリツチ発などと書くと、余が、とうとう初しよいちねん一念つらぬを貫いて、ロンドン上陸後、このハリツチへ来たように邪じやすい推するであろう。しかし、事實は、大ちがいだ。

前報を打電だてんして、それから一時間たつかたないうちに、わが照国丸は、沈没してしまつたよ。どういうわけか、余の乗つた艦か船せんは、いいあわせたように、あつけなく沈没してしまうのである。縁起えんぎでもない沈没ちんぼつ男おとこだ。

しかし今度は、海水の中に漬つけられないで助かつたよ。さすがは、やはり祖国日本の汽船の有難さだ。船長以下船員たちが、避

難作業のときの、あの沈勇なる行動は、どんなに激賞げきしょうしても、ほめすぎるといふことはあるまい。

余は、それを悉く映画におさめたので、本日、なんかの便びんを得て、そちらへ送ろうと思う。原稿の方はすぐ続いて打電するつもりだ。只今、炊たき出しを呉れるというから、これで一応報告を切る。こちらの炊たき出しは豪勢ごうせいだ。七面鳥のサンドウィッチに、ウイスキーの角かく壇たん、煙草はMCCだ。

(×月×日、グラーフ・シユペー号にて)

しばらく通信を怠おこたっていたが、余は三たび艦船をかえ、今は独まめせんかん国豆戦艦グラーフ・シユペー号上で、安泰あんたいに暮している。余が、何処より、本艦に乗込んだか、それは語ることを許されない。

しかし諸君が、北海ほっかいの地図をひき、ユトランド諸島のあたりを子細しさいに検討するなら、そこに或る暗示を得るだろう。

本艦の位置も、これまた遺憾いかんながら、語る自由を持たない。ただこういうことだけは言ってもいいだろう。それは毎夜の如く南なみなみじゆうじせい十字星じゅうじせいが、美しく頭上に輝いている事だ。但し、プラネタリウム館へ入っている訳ではない。

シユペー号では、ラングスドルフ艦長以下が、余を親切に扱ってくれる。本艦上には、シユペー号に撃沈された英国船九隻の船長その他の幹部乗組員が收容されているが、彼等とて、むしろ厚こ遇うぐうされているようだ。今しも彼等が、甲板を散歩しているのが見える。あ、今、何かがあったらしい。甲板上を走る水兵の眼の

中にも、何かあつたらしい事が、よく見える。艦橋には、艦長以下幕僚ばくりようたちが全部集つて、しきりに双眼鏡そうがんきようで覗のぞいている。また英国船を見つけたのであろうか。それにしては、すこしものものしい緊張ぶりだ。

そこへ余の姿を求めてヴォード少尉が駈けてきた。

「あ、海野さん。海戦が始まりかかっています。相当大的な音がしますから、貴下あなたも船底せんていへいかれた方がよいと思います」

余は、胸をはつて、即座そくざに断つた。

「いや、ここにいます。どうか僕にはお構かまいなく、大きな音を出して闘つていただきたい。一体いったい、敵は何者ですか」

「英国の重巡じゆうじゆんエクセターです」

「エクセターなら、平気じゃないですか。向うは八吋インチ砲、こ
 たちは十一吋砲……」

そういつているところへ、モルトケ少尉がヴォード少尉を呼び
 に来た。

「おい、ヴォード少尉、すぐ二番砲塔へ」

「よし来た。だが、僕は補充隊員だぜ」

「所ところが、急に敵が殖ふえたのだ。軽巡けいじゆん アキレスとエジヤクとの

二隻が加わろうとしている」

二人の少壮士官しょうそうしかんは、一しよに駈かけだしていった。それを合あ

図いざのように、シユペー号の主砲六門は、一せいに火蓋ひふたを切った。

あつ、命中だ！ 英艦エクセター号の艦側かんそくから、濛々もうもうたる

黒煙こくえんがあがる。余は……（編集部より申す。海野うんのニセ武官ぶかんのブ
 ンタデレステ沖の海戦報告は、無電によつてここまでは、本社と
 連絡がとれて、受信中のところ、ここでぷつりと電波は切れまし
 た。多分氏自慢の携帯用送信機が英艦の砲弾のため破壊されたの
 でしようと思いますが、生々なまなましい報告を生々しいところで失い、
 甚だ残念ですが仕方がありません。御諒承ごりようしょうを乞こう。尚なお、海野
 ニセ武官の冥福めいふくを、読者諸君と共に祈り上げる次第であります）
 （×月×日、モンテヴィデオ、先さき払ばらい電報）

マタ、フネハシズンダ。コレデ三ドメダ。ヨハ、ラングスドル
 フカンチヨウニタイシ、イサギヨクコウガイニイデ、イギリスカ
 ンタイトタタカウヨウススメタガ、カンチヨウイワク、「ウンノ

サンニノラレタウエカラハ、ドウセ、ハヤカレオソカレチンボツ
ノウンメイニアルノダカラ、ムシロハヤイトコ、ジバクトキメマ
シタ」シユペーゴウノリクミイン四〇〇メイハ、ドイツキセンタ
コマゴウニウツリオエタ。ヨ、ヒトリハ、チンボツオトコナルヲ
モツテ、ケイエンセラレ、タコマゴウニハノセラレズ、チヨクセ
ツモンテヴェイデオコウニリクアゲセラレタリ。イノチビロイノイ
ワイニーパイヤリタシ、スグ〇オクレ、ウンノ。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻 宇宙戦隊」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

入力…tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

沈没男

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>